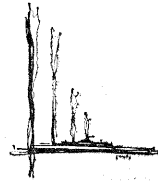


# 幼児教育への期待と展望



## 五 島 貞 次

### § 脚光を浴びる幼児問題 §

最近幼児の教育やしつけということが、ひじょうに重要視されるようになってきた。文部省の教育課程審議会では、さる九月幼稚園教育課程の改善について答申しているし、厚生省の児童福祉審議会でも、こどもの保育はいかにあるべきかについて中間報告を行ない、また児童福祉審議会の家庭対策部会では、こどもを健全に育てるためには、家庭はいかにあるべきか、家庭をいかに援助すべきかの、具体策を答申している。これまで幼児問題にそれほどの関心を示さなかつた新聞その他のマスコミも、きわめて強い関心を持ち、大々的にPRするようになってきた。

次代になうこどもの育成は、いかなる時代でも、どここの国でも、重要な問題であることに変わりはなく、いまさら騒ぎ立てるの

もおかしいが、今日のわが国において、これほどまでに幼児問題が脚光を浴びてきた背景には、やはり今日的な要請があることを忘れてはならないであろう。それは人口革命とも呼ばれている人口構造の急速な変動であり、所得倍増計画に伴う若年労働力の著しい不足であり、それを打開するために高く掲げられた「人づくり」の旗印である。医学や公衆衛生の進歩によって、人間の平均寿命が急激に伸びるとともに、家族計画の普及と、高い水準の消費生活への欲求が高まるにつれて、少産の傾向がますます強くなってきた。

このまま行けば、幼少人口は今後減少の一途をたどり、経済成長に与える障害は少なくない。そうだとすれば、幼少人口の資質いかに、民族の将来を左右する重大な問題といわなくてはならない。もちろん、人口の資質をよくすることは、経済成長や民族発展のための手段ではなく、一人ひとりの人間の福祉を尊重するためではある

が、人づくりが政治の中心課題になったのは、こうした深刻な経済、社会変動の結果にほかならない。幼児時代の人間形成が目まされるにいたったのも、そのような時代の変化の一環とみてよいであろう。

そればかりではない。この数年来、心身障害児や、障害者、非行青少年などの増加が、容易ならぬ社会問題として、クローズアップされてきたことも、幼児時代の人間育成の重大性を改めて認識させる契機になったようである。心身の障害の多くは、乳幼児期の健康管理の手ぬかりから起こることが明らかになり、青少年非行の芽は、幼児期の家庭環境のなかに、すでに生まれつつあることが、ある程度科学的にも裏づけられるようになった。こうしたことも、幼児の人間育成の意味を高く評価させる機縁となった、といえるであろう。

### § 新しい人間づくりを目指す

幼児教育の望ましい方向を考えるに当たって、当面手がかりを与えてくれるのは、さきにふれた教育課程審議会の幼稚園教育課程の改善に関する答申である。そのなかで、小中学校教育課程の改正は、究極において将来の日本をなうに足りる国民の育成をめざすものであるが、幼稚園教育もこの基本方針にそって一貫した目標のもとに営まれる必要がある、といっている。この点は注目されてよからう。戦後の支配的な風潮として、民族なり国家の繁栄と切り離された個人の福祉のみを重視する考えかたが強かったが、それに對

して将来の日本を視野に取り入れ、より高次の「新しい人間像」を指向しているように思われる。

またわが国の家庭にみられる幼児に対する過保護、直愛、放任などをいましめるとともに、日常生活の基本的なしつけの重要性を強調し、人間尊重の精神にもとづく道徳性の芽ばえを正しく伸ばすことをうたっているのも、幼児教育の方向を示すものとして、高く評価されてよいであろう。戦前の、上からの押しつけ教育の反動として、戦後の教育を支配した原理は、こどもの自主性尊重の思想であったが、判断力の未熟な幼児時代には、自主性よりもむしろきびしいしつけや、教育が、より重要な意味を持っている、といわねばならないであろう。日常生活の基本的な習慣は、幼児の内側から自然に生まれてくるものではなく、自主的に形成する力を、彼らは持っていない。おとながしつけや教育によって、身につけさせるほかはないのである。日常生活の習慣だけでなく、みずからの健康や安全を守り、道徳的心情を伸ばすにも、教育の力によらねばならぬことはいうまでもない。その点でこの答申は、幼児の人間形成に関して、きわめて積極的な姿勢をとっているように思われる。

さらに、好ましくない社会的環境から幼児を守り、環境の改善に努める必要を強調しているが、これも当然のことといつてよからう。現代のとくに大都市のこともたちは、ばい煙や排気ガスで健康をむしばまれ、自動車専用道路の拡張やビルの増設によって、遊び場をつぎつぎに奪われつつある。高層アパートのベランダから落ち

て死んだり、電機洗たく機のなかに落ち込んだり、ダンプカーにはねられたり、タメ池に落ちたり、日夜いたましい事故が続出している。あるいは、誘かい事件の犠牲になるのも少なくない。いわゆる狂った社会の最大の被害者は、幼児といってもよいのである。こうした有害な環境から幼児を守るには、家庭、教育者、地域社会などの協力が必要であり、政府なり自治体としても手を打たなければならぬ問題が少なくない。教育関係者だけの力ではどうしようもないともいえる。だが、幼児教育の分野でやれる対策も少なくないはずである。交通安全教育、屋外や屋内の安全教育、日常の身近かな保健衛生のしつけなどが、徹底的に行なわれなければならないであろう。

#### § 集団化時代に必要なこと §

しかし、幼児教育の今後のありかたについて、なお検討しなければならぬ問題も少なくない。その一つは、幼児までも進学競争に巻き込んではならない、ということである。こんどの答申でも、幼稚園教育が、小学校教育の単なる準備のために、これと類似の教育を行なってはならない、といっているが、成績の優秀な小学生をつくるための場となつてはなるまい。いま保育所にこどもをあずけている父兄の間に、保育所でも幼稚園と同程度の教育を行なつてほしい、との要望が強くなつていられるといわれる。もしこの要望が、小学校に入学したときに、幼稚園出身のこどもより学力の劣っていない

こどもに仕立ててほしい、という願ひから出ているとするなら、幼児教育なり保育の本質をわきまえない偏見といわなければならぬであろう。小学校で覚えるべき知識は、小学校にはいつてから覚えればよいはずである。小学校にはいるまでに身につけておかなければ、小学校のほうで困るような、あるいは小学校でそういうことに力をいければ、本来の小学校の教育作業に支障を来たすような、基本的なしつけ、生活慣習の育成こそ、幼児時代に十二分に行なうべきであろう。

第二は、これも答申でふれているが、個性をのばし、たくましい人間を育てることに、とくに配慮してほしい、ということである。教育はモノを生産する仕事ではなく、人間を形成する特殊な仕事であることは、いまさら断わるまでもない。オートメ工場で全く同じ形と色彩を持つ、寸分違わぬ電気製品を、大量生産するのではない。千差万別の個性、素質、能力をもつたこどもを育成するわけである。集団的、画一的な一斉訓練ももちろん大事ではあるが、それと同時に、集団のなかに埋没しない、よい意味の強い個性と、たくましい独創力を育てる努力も怠つてはならないであろう。現代のような異常な集団化時代においては、なおさらこのことの必要性を痛感せざるをえないのである。

それに関連して、教育や指導技術の進歩や高度の専門化が、こどもからたくましさを奪い、なにか無気力な、ひ弱い人間にする危険性はないだろうか、という疑問も出てくる。教育のしろうとの取り

越し苦勞であれば結構だが、完備した教室、運動場、娯楽室で、いたれりつくせりの設備、教材、教具に取りかこまれ、寸分すきもない計画によって、教育、訓練を受けていることも想像すると、なにか大きなものが欠けてはいはないか、といった感じが、ふと胸をかすめる。それはストレイトの大自然と、そこでエネルギーを思う存分発散して、あばれ回る子どもの群象である。西欧先進諸国では、こどもにとっていちばん大切なのは、太陽の光ときれいな空気と水と土である、といわれている。東京のような大都市のこどもに与えられているのは、スモッグでよごれた太陽の暗い光と、排気ガスで汚染された空気と、工場廃液でどす黒くなった臭い水と、舗装された土である。幼児教育の関係者は、自然にめぐまれぬ大都市のこどもに、できるだけストレイトの自然に接触する機会を与えることを、真剣に考えてもらいたい、と思うのである。たくましい人間は舗装道路や、自動車や、遊具から生まれるのではなく、露のしたたる雑草の繁った大地や、サカナのはねる清流のほとりから生まれるのである。

### § 義務制は時期尚早の感 §

つぎに問題にしたいのは、幼児教育の義務制についてである。これには小学校を一年下げの方法と、五歳児についてだけ幼稚園を義務制にする方法とが考えられるが、いずれにしても、現段階では幼児教育の義務制は時期尚早で、具体案などを考えるべき時ではない

と思う。幼稚園に対する国庫補助も、なお慎重に検討する必要がある。それよりも、保育に欠ける子どもをどう保育するか、という教育以前のさしせまった問題がある。保育と教育とは密接な関連をもち、幼児の場合は、これを切り離して考えることはできないが、生命の安全と、心身の成長の保障は、しつげや教育以前の、もっとも基本的な問題だといわざるをえない。

これに関連して、幼稚園と保育所との関係をどう調整するか、という問題がある。教育課程審議会の答申では、幼稚園の教育が保育所の保育と深い関連にあることを考慮する必要がある、といっているにすぎず、具体的にどうすべきかを示していない。児童福祉審議会の保育制度特別部会の答申でも、まだ明確な結論を出していない。すなわち、幼稚園における保育内容と、保育所におけるそれは、調整をとることが必要であり、保育所及び幼稚園に入所しているこどものいずれを問わず、必要な同一水準の幼児教育が与えられるべきであるが、幼稚園の振興と、保育所制度との調整については、早急に検討する必要があると思われる、といっている。この問題については、いずれ保育部会で結論を出さねばならないが、少なくとも、幼児にはできるだけ同一水準の教育を与えるのが望ましいこと、保育に欠けることもと保育に欠けないことには、それぞれ異なった処遇が必要であること、公費はより必要なところへ、まず重点的に振り向けられなければならないことには、おそらくだれも異論を唱えないであろう。

(毎日新聞論説委員)